

## 第61号

## ● 目次 ●

巻頭言「社会貢献と研究」	1
最近のシンポジウム等	2
東北大学東北アジア研究センターシンポジウム「ヴェールの向こう側から—北朝鮮民衆の文化人類学的分析」	2
東北アジア研究センター研究成果報告会	3
受賞 麻田雅文・教育研究支援者の著書が、榎山純三賞、鉄道史学会住田奨励賞を受賞	3
最近の研究会	4
東北アジア研究センター公募型共同研究「モンゴルにおけるキリスト教宣教と聖書翻訳の過去と現在」	
公開シンポジウム「聖書翻訳を通して見るモンゴル世界」	4
東北アジア研究センター共同研究「東北アジアにおける辺境地域社会再編と共生様態に関する歴史的・現代的的研究」	
シンポジウム「越境する東北アジア：共生のダイナミズム」	4
東北アジア研究センター共同研究「近世・近代における内陸アジア遊牧民社会の構造的特質とその変容に関する研究」	
平成25年度第2回研究会	5
東北アジア研究センター公募型共同研究「社会的行為としての〈食〉をめぐる文化人類学的研究」ワークショップ	5
著書紹介	6
客員・新任紹介	7
活動風景	8
編集後記	8

## 巻頭言

## 社会貢献と研究

 東北アジア研究センター長  
 岡 洋樹

研究者に社会への貢献が求められるのは、今に始まったことではない。しかし社会に何らの貢献もしないと達観するような研究者はまずいないであろうから、問われているのは貢献の在り方なのである。そもそも何かの役に立つためには、役に立つのが何に対してなのか明確でなければならない。社会にはさまざまな職業や立場の人々が暮らしているのだから、この点をまず明確にしない社会貢献は絵に描いた餅である。

産学連携とか、国家政策への貢献というのは、「何か」が明確でわかりやすく、そのような研究も数多いが、それだけで研究の貢献を尽くせるものではない。講演会のようなアウトリーチ活動を社会貢献の概念に含めることが多いようだが、これは広い意味での教育・啓蒙に属する活動であって、研究そのものではない。昨今はよく教養の重要性が唱えられるが、教養もやはり教育の問題である。教育と研究は不可分だという議論もありうるだろうが、両者はいちおうレベルを異にする営為である。では研究が社会貢献たりうるためにはどうあればよいのだろうか。

私には問題は、社会貢献の有無ではなく、いかに社会に貢献するかにあるように思われる。例えば人文学が社会の毒にも薬にもならない道楽だと思ったら大間違いである。それは、歴史学が国家の今を正当化する論理として活かさ

れてきた歴史を見れば一目瞭然であろう。歴史学の「社会貢献」の結果たるや、死屍累々なのだ。工学分野での軍事技術の開発も同様であろう。結局己れの研究がいったい何をもたらすのかを自問することが、学問は役にたつのかとい

う問いへの答えとなるのだろうか、「技術者」ではない「学者」たるものの責務なのだろう。学生時代の教養を思い出そう。我々の必読書の一つだったマックス・ウェーバーの『社会科学方法論』（岩波文庫15頁）はこう論じている。「更に若しも或る考へられた目的への到達の可能性が与えられてゐるようにはみえた場合には、もちろんいつでもその時の我々の知識の限界内においてではあるが、必要な手段の使用が、全事象の全聯関に基づいて、所期の目的の達成のほかに如何なる諸結果をもたらすであらうかといふことをも確定することができる」と。そして彼は言う。それは「もとよりもはや科学のなし得る任務ではなく、意欲する人間のなし得る任務である」と。「意欲する人間」としての学者は、果たしてそれをなしえているであろうか。



最近のシンポジウム等

# ① 東北大学東北アジア研究センターシンポジウム 「ヴェールの向こう側から —北朝鮮民衆の文化人類学的分析」 (2月15日、片平さくらホール)



悪天候にもかかわらず一般参加者にお集まりいただいた会場



大雪に見舞われた会場の片平さくらホール

東北アジア研究センターが例年開催している公開シンポジウムとして、平成25年度は北朝鮮社会の民衆生活の実態把握をテーマとしたシンポジウムを開催しました。北朝鮮といえば、東北アジアの重要な一角をなし日本にとって直近の地域にありながら、これまでは学術的な調査研究の及びがたい世界でありました。北朝鮮の政治経済体制自体が外国に対し閉ざされた性格をもち、外部の調査者が入れないこと、またわれわれの対北朝鮮への関心のあり方が、政治・軍事的な問題に偏りすぎ、人々の日常的社会生活の実態には目が向き難いことから、そこには2重のヴェールが覆い被さっているとも言えます。これらのヴェールを取り去ることは容易ではありませんが、近年、多様な手段を駆使して先駆的な研究を試みている研究者がおられます。本シンポジウムは、そうした貴重な研究の成果に触れ、現状の分析と今後の研究展開の見通しについて議論を重ねることを目指したものです。

報告者の一人、伊藤亞人・東京大学名誉教授は、長年にわたり韓国社会の文化人類学的な研究を行ってこられました。最近では中国吉林省での「脱北者」へのインタビュー調査などを通じて、北朝鮮社会の分析にも精力的に取り組んでおられ、その成果の一端を御報告いただきました。次に、自らが「脱北者」としての経験をもち、現在は韓国の北韓学大学院大学校北韓微視研究所研究員ならびにフリーライターとしても活躍されている安鍾秀（アン・ジョンズ）

先生には、北朝鮮の人口動態に関する詳細な分析を、御自身の生活体験も交えてお話いただきました。そして、韓国生まれで現在東北大学大学院教育学研究科准教授として東アジアの移民家族の家庭教育問題などを研究しておられる李仁子（イ・インジャ）先生には、「脱北者」への聞き取り調査をもとに、彼らの「脱北」後の社会適応の現状などについて御報告いただきました。

コメンテーターとしては、轟莉莉（ニエ・リーリー）東京女子大学現代教養学部教授に、主に中国の文化大革命時代の民衆生活との比較を通じたコメントを、また三村光弘・公益財団法人環日本海経済研究所調査研究部長に、北朝鮮社会の経済制度や法規を熟知しておられる立場からのコメントをいただくとともに、報告者を交えた討論を行いました。当日は仙台がこの冬2度目の大雪に見舞われた日で、交通機関などに混乱が生じましたが、足場の悪い中、数十名の熱心な一般参加者の方々に御来場いただき、質疑にもお加わりいただきました。

とかく政治的な「非難」または「礼賛」の言説や、時事的な新奇性のみの追究に偏りかねないテーマについて、具体的なデータにもとづいて客観的な議論を展開できたことは、大きな成果であったと考えます。なお、このシンポジウムの内容は、今年度内に東北アジア研究センターより報告書として刊行の予定です。

（瀬川昌久）

## ② 東北アジア研究センター研究成果報告会

2014年3月28日に、東北大学片平さくらホールにて、東北アジア研究センターの2013年度研究成果報告会が開かれた。この報告は、年に一度、プロジェクトユニットの事業内容、所内共同研究、公募共同研究、個人研究の進捗状況について発表する企画である。東北アジア研究に関わるセンター内外の研究者交流を深めることで、研究所組織としての本センターの研究の拡張性と連携性を強化することを目的として行われている。

発表者の数が増えつつあったこともあり、今年度は口頭発表とポスター発表双方を設けた。また口頭発表についてはゆるやかであるがテーマ別の編成として議論がある程度連続させることを試みた。発表数は口頭報告が14本、ポスター発表が12本となり、合計26本の報告で構成された。当日は50名の参加者があり、午後1時から6時まで熱心な質疑応答が行われた。

本センターは中国・朝鮮半島・モンゴル・ロシアを文理連携して解明することを目的としているが、やはり複数国家・地域にまたがり、文理が融合ないし社会実践も視野に入れている報告が印象に残った。字数の都合で、発表内容全部を紹介することは残念ながらできないので、詳しく知りたい方は以下のURLを見て欲しい。

<http://www.cneas.tohoku.ac.jp/news/2014/session.html>

以下では個人的に印象に残ったものを紹介したい。まずは、麻田雅文氏の「ソ連側から見た奉天紛争 1929年」と石渡明氏の「サハリンの油田開発史における日本の関与である。中国とロシア、ロシアと日本に関わる20世紀初頭の歴史が現代に連なることを示したからである。特に地質学者の石渡氏が語る歴史は、分野を越境する際の学問の可能性を強く感じさせるものだった。また桜美林大学・中生



勝美氏の「福島原発事故による環境汚染に対する集落単位の除染活動と台湾離島の核廃棄物貯蔵場の完全管理」は放射能工学と人類学フィールドワークの連携を試みるものであった。また清泉女学院大学・芝山豊氏の「モンゴルにおけるキリスト教宣教と聖書翻訳の過去と現在」はポスト社会主義の文脈と文明の交流という点でモンゴル研究をより広い視座のなかで検討することの興味深さを示していたと思う。最後は、ポスター発表の平野直人氏らによる「根室半島～北方領土歯舞群島の特異な地質と、その岩石試料・野外データ・文献検索」である。北方領土という現地調査が困難であっても文献データで探査・分析を行おうとする姿勢が印象に残ったと同時に文献でここまでわかるのかと驚いた。

なお終了後は、本センターの2013年度の送別会も合わせた懇親会が片平北門会館で行われ、こちらも大いに盛り上がった。(高倉浩樹)

### 受賞



2013年11月13日(水)第8回「榎山純三賞」の表彰式(於ホテルニューオータニ)。壇上左は『蒋介石の外交戦略と日中戦争』(岩波書店)で受賞した家近亮子先生(敬愛大学)。

### ●麻田雅文・教育研究支援者の著書が、榎山純三賞、鉄道史学会住田奨励賞を受賞

東北アジア研究センター教育研究支援者麻田雅文氏が、著書『中東鉄道経営史 ロシアと「満洲」—1896-1935』(名古屋大学出版会、2012年刊)で、榎山奨学財団の第8回(平成25年度)榎山純三賞の学術書部門、鉄道史学会の第4回(2013年度)鉄道史学会住田奨励賞を受賞しました。

麻田氏は、現在東北アジア研究センター・プロジェクト・ユニット「20世紀ロシア・中国史再考研究ユニット」(研究代表者:寺山恭輔教授)で教育研究支援者を務めています。(麻田雅文)

最近の研究会

③ 東北アジア研究センター公募型共同研究

「モンゴルにおけるキリスト教宣教と聖書翻訳の過去と現在」  
公開シンポジウム「聖書翻訳を通して見るモンゴル世界」

日時：2014年3月2日（日）14:00～17:00

会場：東北大学東北アジア研究センター 4階大会議室

本シンポジウムでは、2013年度に実施された公募型共同研究「モンゴルにおけるキリスト教宣教と聖書翻訳の過去と現在」における各メンバーの研究成果が発表され、情報交換と討論が行われた。

まず、代表の芝山豊氏（清泉女学院大学）が研究史の概観と本シンポジウムの趣旨説明を行ったのち、各メンバーの研究発表が行われた。最初の報告では、バイカル氏（桜美林大学）が、スウェーデン宣教団の活動と関連資料について現地調査の写真などを合わせながら紹介し、内モンゴルにおける宣教師と知識人の影響関係について分析した。次に、滝澤克彦（東北大学）が19世紀前半のモンゴル語訳聖書における「神」の訳語をめぐる論争をとりあげ、その背後における19世紀の宣教思想と翻訳論の関係について論じた。最後に、芝山豊氏（清泉女学院大学）が、モンゴルにおいて歴史的に「他者化」されてきたキリスト教が、民主化以降、新たに教勢を拓げている状況をどう捉えるべきかを、日本や韓国との比較

も視野に入れながら、エスニシティの問題と関連づけて論じた。



1821年発行のモンゴル語訳福音書

研究発表に引き続き、岡洋樹氏（東北大学）により研究発表に対するコメントが寄せられた。まず、モンゴル史研究という枠組みのなかでは、まだまだ未開拓のテーマとの認識を示し、そのような意味で外来の宣教師の文脈をモンゴル史の文脈にどのように位置づけられるかという問題が投げかけられた。さらに、モンゴル＝仏教国という「伝統の発明」の成立過程における歴史的条件や、宣教をとりまく状況をめぐる中国とモンゴルの違いなどについて質問された。それらのコメントに対する回答および討論を通して、現代モンゴルの宗教とエスニシティをめぐる問題を考察する上で、改めてモンゴルにおけるキリスト教の歴史に注目することが重要であることを確認した。（滝澤克彦・長崎大学）

④ 東北アジア研究センター共同研究

「東北アジアにおける辺境地域社会再編と共生様態に関する歴史的・現代的な研究」  
シンポジウム「越境する東北アジア：共生のダイナミズム」

“Cross bordering Northeast Asia : the Dynamism of Cohesive Borderlands-”

(2014年3月8日)

本シンポジウムは、科学研究費補助金基盤研究（A）を資金とする共同研究グループ（研究代表者 岡洋樹）が実施したものである。東北アジアは、17世紀以来、露中の大国統治を基調としたが、変動期では国境を越えた人と物の流れが生まれた。本共同研究は、20世紀初頭の時期を第一変動期、20世紀90年代から21世紀初頭を第二変動期として捉え、それぞれの時期の比較検討を通じ、東北アジアの共生のダイナミズムを解明しようとする。本年度は、外部研究者との意見交換を目的に本シンポジウムを開催した。東北大学東京分室で開催されたシンポジウムでは、第二変動期班が第一セッション「中口国境地域交流の過去と現在」を、第一変動期班が第二セッション「変容するモンゴル」を企画し、講師とコメンテーターを選定した。第一セッションでは、セルゲイ・トカチェフ氏（極東連邦大学）「ウスリー川流域開発における露中競争の起源（19世紀末～20世紀初頭）」、藤原克美氏（大阪大学）「ハルビンにおけるロシア・

ビジネス：チュリン商会の歴史から」、馬紅梅（松山大学）「露中国境地域における越境交流：現状と展望」の三報告と、イゴリ・サヴェリエフ氏（名古屋大学）、生田美智子氏（大阪大学）、松野周治氏（立命館大学）によるコメントが行われた。一方第二セッション「変容するモンゴル」では、白拉都格其氏（内蒙古大学）「清末の移民とジレム盟の政治的中心の変遷」、フフバートル氏（昭和女子大学）「非漢字圏のモンゴル語の近代語彙受容」、麻田雅文氏（東北大学）「辛亥革命前後のロシアの「満蒙」政策—錦愛鉄道とモンゴル縦断鉄道の計画を中心に—」の三報告と、柳澤明氏（早稲田大学）、井上治氏（島根県立大学）、岡洋樹（東北大学）によるコメントが行われた。各報告は、いずれも移民や国境交易、政治・文化など、変容の諸相を捉えており、東北アジアの地域形成理解への示唆に富むものであった。（岡洋樹）



シンポジウム会場の様子

## 5 東北アジア研究センター共同研究

# 「近世・近代における内陸アジア遊牧民社会の構造的特質とその変容に関する研究」平成25年度第2回研究会 (2014年3月11日)

本共同研究は、内陸アジア史上大きな役割を果たしたモンゴル遊牧民の歴史的な社会構造を解明することを目的とし、国内での研究会開催の一方で、モンゴル国ウラーンバートルで国際シンポジウムを開催している。本研究会は、本年度二回目の国内研究会である。今回の研究会では、内蒙古大学教授で中国におけるモンゴル近代史の泰斗である白拉都格其氏による講演「辛亥革命とモンゴル民族問題の転変」と、渡辺健哉氏（東北大学大学院文学研究科）「遼・金・元代の複都制」、ナツァグドルジ・ハタンバートル氏（モンゴル国立科学アカデミー歴史研究所）「イェ・フレーの起源とパロン・フレー及びサリダク寺」、そして堀内香里氏（東北大学大学院環境科学研究科）「清代モンゴルにおける社会関係調整様態に関する一考察：清代後期のハルハ・セツェン汗部中前旗内部における牧地変更事案を通して」の三つの研究報



研究会の会場

告が行われた。近代における民族問題、征服王朝が建設した都市の意義、チベット仏教の普及、そして遊牧民の社会関係調整の在り方など、各報告は広範かつ重要な問題を提起している。当日はモンゴル史・中央アジア史・中国史などを専門とする参加者が活発な議論を行った。（岡洋樹）

## 6 東北アジア研究センター公募型共同研究

# 「社会的行為としての〈食〉をめぐる文化人類学的研究」ワークショップ

2014年3月18日、当センターにて公募共同研究「社会的行為としての〈食〉をめぐる文化人類学的研究」ワークショップが開催された。櫻田涼子代表（育英短期大学）による趣旨説明では、社会的行為に焦点を当て、食により構築される関係を分析する意義と、これまでの研究での問題点が述べられた。その後、3名の研究発表が行われた。吉本康子氏（国立民族学博物館）は「食行動にみる宗教カテゴリーの流動性：ベトナム、チャムの事例を通して」において、食をめぐる実践は人々を同化あるいは差異化するひとつの局面と捉える本共同研究の視点を踏まえ、複数の宗教コミュニティ間における関係性の構築と断絶のあり方を提示した。神谷智昭氏（琉



ベトナムのカオダイ教寺院における菜食（伊藤まり子氏提供）

球大学）は「韓国の犬肉食について：食と人間関係に関する一考察」にて韓国農村での人間関係における犬肉食の役割を考察し、不浄性をもつ食物の共食により仲間意識が創り出されること、性的な話題等軽口を言い合える冗談関係も一時的に創りだされること等が指摘された。伊藤まり子氏（国立民族学博物館）は、「関係をつむぎ、再編するための菜食：ベトナム・ハノイの宗教コミュニティに集う女性信者たちの事例から」において、宗教コミュニティに集う女性信者たちの「菜食」に対する意識のズレと、それをめぐる態度等を考察した。伊藤氏は、ベトナムの「菜食」では菜食の意義よりも調理の協働や共食に価値が置かれると指摘し、それゆえに「菜食」の実践は、差異や境界を生むのではなく、アクターが他者との関係を生起、再編する契機となるとした。以上の発表に対し、コメンテーターの河合利光氏（園田学園女子大学）は、本日の発表は、いずれも肉食、もしくは肉食を禁じる菜食に関連しており、肉のもつ「片側性」に注目できること、「食」というものは自然と文化の接点であり、大変意義のある研究課題であること等を指摘した。こうした指摘を踏まえ、本共同研究では今後研究の成果を深化させ、成果の出版を目指すことを確認した。（稲澤努）



BOOKS 著書紹介

センター関連出版物

### 無形民俗文化財が被災するということ—東日本大震災と宮城県沿岸部地域社会の民俗誌

高倉浩樹・滝澤克彦編、新泉社  
2014年1月



形のない文化財が被災するとはどのような事態であり、その復興とは何を意味するのだろうか。本書は、震災前からの祭礼、民俗芸能などの伝統行事と生業の歴史を踏まえ、甚大な震災被害をこうむった沿岸部各地域社会における無形民俗文化財のありようを記録・分析し、社会的意義を考察したものである。東北アジア研究センターは宮城県から津波被災地における無形民俗文化財調査事業を受託した。この成果の一部は、東北アジア研究センター報告の5号(2011年)と9号(2013年)で刊行されている。それらが資料集だったのに対し、本書は分析編といえる。一般から専門家まで幅広い読者層を念頭に編まれた本であり是非一度手に取って欲しい。

### 東北アジア研究センター報告第 10 号 地域の歴史を学ぶ —宮城県大崎市の文化遺産—

荒武賢一朗編 2013年10月



2012年12月に開催した「講座：地域の歴史を学ぶ◎岩出山」の成果と、宮城県大崎市域の歴史資料をまとめたものである。具体的には古代の多賀城廢寺をめぐる検討、江戸時代の岩出山伊達家をめぐる人的諸関係の分析など、文献資料や絵図を用いて史実の解明をおこなっている。なかでも本書の特色は、当地で歴史資料を解読・分析に熱心な岩出山古文書を読む会の会員諸氏と、東北大学の歴史研究者が協力し、ひとつの地域研究のあり方を提示し、「調査から研究へ」という流れのなかで本書の重要性は極めて大きいと自負している。

### 東北アジア研究センター叢書第 52 号 蒙文倒綱—モンゴル語 ローマ字転写配列—

栗林均・ス欽巴図編 2014年2月



『蒙文倒綱』は賽尚阿(サイシャング)による1851年の序をもつモンゴル語・漢語・満洲語の3言語対照辞典で、全16巻からなる写本である。同書は、字母順配列のモンゴル語辞書の嚆矢として清朝の後期に通行し、近代モンゴル語辞典の発展に大きな影響を与えた。原写本の影印は『蒙文倒綱—資料編・原本影印—』(東北アジア研究センター報告第6号、A4判590頁)として公刊された。

本書は、『蒙文倒綱』(全16巻)の全項目についてモンゴル語と満洲語をローマ字転写し、漢語を翻刻し、モンゴル語のローマ字転写のアルファベット順に配列したものである。見出し語のモンゴル語にはモンゴル文字表記を付し、それぞれの項目が記載されている原本の位置を巻数と丁数で示した。B5判、603頁。

### 東北アジア研究センター報告第 11 号 『開元占経』 閩本の資料と解説

佐々木聡編著 2013年12月



本書は『開元占経』の新資料「閩本」に基づく資料集である。『開元占経』は唐・玄宗の勅命により瞿曇悉達らが編纂した天文占・暦法の集大成であり、祥瑞災異思想を背景に持つ国家理念を研究する上で基礎となる資料である。閩本は明朝の秘閣所蔵本を祖本とし、民間で発見された従来の通行本とは、一部で全く異なる内容を持つ(閩本巻91~97)。本書はその特異な内容の翻刻資料を中心に、各伝本等の図版・解題論文・関係資料・索引など、コンパクトながら新資料を運用する上で必要となる各種データを網羅する。天文占や暦法は、その後、東アジア諸国に広く伝播し、受容された。本書も中国のみならず、アジア研究に広く利用して頂ければ幸いである。

### 東北アジア研究センター報告第 12 号 孝経 —モンゴル語古訳本—

栗林均著 2014年1月



『孝経』は孔子が弟子の曾子に孝の道を説いたと伝えられる儒教の経典として名高い。本書は、13世紀の元朝の時代にモンゴル語に翻訳・開版されたとみなされる漢語とモ

ンゴル語の対訳木版本「孝経」の影印と本文のローマ字転写、モンゴル語の全単語と語尾の索引である。

影印の原本は中国故宮博物院図書館に所蔵される孤本であり、これまで何回か公刊された影印はいずれもモノクロの縮小印刷であった。本書は、原本の体裁に合わせて、全74頁を原寸大のカラーで再現している。

ここに記されるモンゴル語は、元朝の時代にまでさかのぼるウイグル式モンゴル文字の資料としてモンゴル語文献学、モンゴル語史の研究にとって貴重な資料である。A4判、186頁。



●客員教授

サムイルドンドヴ  
チョローン  
ハルアドゥタン

4月1日、チョローン博士が客員教授として着任された。チョローン博士は、モンゴル科学アカデミー歴史研究所長を務めるモンゴル国気鋭の研究者である。チョローン氏の研究は、17世紀の露蒙関係史に関するもので、ロシア所蔵のアーカイブ史料を駆使して、中国史料やモンゴル史料からは窺うことの難しい両国の関係史解明を目指している。東北アジア研究センターは、2000年8月に締結した学術交流協定に基づき、これまで岡洋樹教授を中心にモンゴル国の研究機関と歴史学分野での交流を重ねてきた。今回のチョローン博士の招聘は、両者の交流をさらに深めることを目的としている。ちなみ

にチョローン博士のお名前は、ハルアドゥタンというのが氏族名、サムイルドンドヴが父君の名、そしてチョローンが本名であり、モンゴル人は普通この本名で呼ばれる。(岡洋樹)



●客員教授

ラリサ・  
プロゾロバ

2014年4月18日にロシア科学アカデミー生物・土壌科学研究所(ウラジオストク)のラリサ・プロゾロバ教授が本センターの客員教授として赴任された。教授の専門は生物地理学、生態学、分類学で、特に軟体動物の研究で著名である。これまでロシア極東地域を中心に、北はアラスカから南はベトナムに至るまで、幅広い地域の軟体動物を扱った生物地理学や分類、進化史の研究で成果を挙げ、200篇以上の論文を発表している。最近では、特に環境汚染の影響が顕著になりつつある極東ロシア地域の陸水域の生物多様性の保全を目的とした研究や

活動に力を入れている。今回の東北大学滞在中では、バイカル湖やアムール川水系の生物相と琵琶湖など日本の淡水生物相の共通性について研究を行うほか、日本の淡水生物相研究者との交流を深めることを大きな目的としている。今回の教授の滞在を機に、これまで交流の乏しかった日露の生物多様性分野の交流の活発化と、ロシア科学アカデミー生物・土壌科学研究所をはじめ、ロシアの生物科学分野の研究機関と本センターの学術交流が一層深まることを期待する。6月17日まで滞在される。(千葉聡)



●教育研究支援者

及川 高

4月より赴任しました及川高と申します。専門は民俗学で南西諸島(奄美・沖縄地域)を調査地に、伝統的な民俗宗教が経た近代史を考察してきました。宗教に関心を持ったのは中学生の頃に世間を騒がせたオウム真理教の一連の事件がきっかけです。それ以降「宗教」と「非宗教」は何をもって分けられるのか、オウムのような宗教と墓参りや初詣のような文化とは何が違うのか、といった問題を考え続けてきました。フィールドとしてきた南西諸島は仏教・神道が普及していないため「あなたの宗教は？」と尋ねると「強

いて言えば先祖」という答が返ってくるなどの葛藤が見受けられ、その戸惑いの考察から「宗教」の語感の歴史性・状況性を考えてきたのがこれまでの研究です。

ところで今、東日本大震災から3年経って被災地からの移転事業が本格化する中、墓や神社の移転は政教分離原則のため行政支援の対象外となり、葛藤の種となっています。身近にして解き難いこの種の問題に、マクロな状況とミクロな地域社会を往還しながら現実的な答を探っていくことが私の課題です。



●教育研究支援者

岡本 哲明

今年4月に東北アジア研究センター「東北アジアにおける大気環境管理スキームの構築研究ユニット」の教育研究支援者として着任いたしました。現在の専門は国際関係論および環境政策論ですが、学生時代から現在に至るまで何度か専門を大きく変えており、約3年前に現在の社会科学系分野に移るまでは自然科学系の分野で研究を行っておりました。

環境政策の形成・発展には多くの場合裏付けとなる自然科学的知見が必要となりますが、その知見の取り扱い方を巡って対立が起こることもめずらしくはありません。私の中心的な研究テーマである東北アジアの越境大気汚染問題でも、大気汚染物質がどの程度越境しているのか、またその物質によって生じる被害はどの程度なのか

といった点をめぐって国家間の意見が対立しています。越境大気汚染に対処するための国際枠組みがすでに形成されている欧州および北米において、これらの自然科学的知見をめぐる対立の解消を目指してなが行われたのかを、自然科学・社会科学の両側面から分析することで、東北アジア地域において越境大気汚染に関する国際的な管理体制の構築が停滞している要因を明らかにしていきたいと考えております。

文系と理系、双方の研究者が集っている東北アジア研究センターは、社会の中で利用される自然科学的知見について考察するのに非常に適した場所であると感じております。みなさまからいろいろな刺激をいただけることを楽しみにしております。よろしく願いいたします。

活動  
風景

## NPO法人宮城歴史資料保全ネットワークにおける被災資料修復作業

東北アジア研究センター助教 友田 昌宏

NPO 法人宮城歴史資料保全ネットワーク（以下、宮城資料ネット）は、2003年7月26日の宮城県北部地震を契機に、被災した文化財の救済を目的として、県下の歴史研究者・大学院生・文化財行政自治体職員を中心に設立された（NPO認証は2007年）。以後今日に至るまでの地道な活動は各方面において高く評価され、今や全国的にも知られる存在となっている。この間、2009年3月11日には東日本大震災が発生し、県下の歴史資料も多大なる被害を蒙ったが、そのことが宮城資料ネットの存在をより高からしめる結果となり、文化財としての古文書の価値に目を向け始めた一般市民の方々の御参加も得て、宮城資料ネットの活動はそれまで以上に裾野を広げつつある。

現在、宮城資料ネットの事務局が置かれる災害科学国際研究所（以下、災害研）歴史資料保存研究分野研究室では、被災地から搬入された歴史資料の修復作業が行われている。作業参加者は、宮城資料ネットの社会人スタッフの方々10名程、それに東北大学や東北学院大学から学生の皆さんが多数参加され、研究室はいつも活気にみちあふれている。東北アジア研究センター上廣歴史資料科学研究部門（以下、上廣部門）は2012年の発足以来、宮城資料ネットの活動を通じて、県下の歴史資料保全活動に従事しているが、2013年10月から私が週2日この修復作業に参加させていただくこととなった。

1日は天野真志氏（災害科学国際研究所歴史資料保存研究分野助教）の御指導のもと、主に石巻市のT家をはじめとする水損史料のクリーニング作業を行っている。赴任早々の私が目にしたのは、津波の被害をうけ、まるで土塊のようになった古文書であり、その姿は東日本大震災の被害の大きさを身を以て示していた。かかる状態に陥った古文書は、まず刷毛で丹念に泥を払い落とされ、水洗い、フラットニング、乾燥という行程をへて袋詰めされていく。とりわけ破損の激しいものについては専用の機材を用いて、リーフキャスト（紙繊維を水に分散させて作った懸濁液を紙媒体記録資料の欠損部に充填して、補填する修復技術）処理が施される。帳簿類に関しては、開披不能のものも多いが、可能であれば、一丁一丁、丁寧に開いていき、綴じ紐をほどき、前述の処理を施した後、もう一度もとの綴じ方で綴じなおすことで、原状の復元につとめている。

もう1日は蛸名裕一氏（災害科学国際研究所歴史資料保



修復作業の風景

存研究分野助教）の御指導のもと、主に石巻市のG家のふすまの下張り文書のはがし作業を行っている。まず、襖の骨組から襖紙を破損しないよう丁寧に取り外していく。そのうえで襖紙に薬品をぬって下張りとなされた古文書をはがれやすい状態にし、古文書一点一点に番号をつけた後、幾層にもなる古文書をパレットナイフや竹ベラ等ではがしていく。

いずれも地道な作業であるが、その行程ひとつひとつに長年の活動のなかで蓄積されてきた、きめ細かなノウハウがあり、それらは今や「宮城方式」の名で定着しつつある。その粋の一端に触れんとして遠方の大学からも先生がゼミ生の方々とともにお越しになることもしばしばである。そして、宮城資料ネットの社会人スタッフや学生の皆さんは、貴重な歴史資料を後世に伝えていくことに誇りを持ち、この地道な作業を至極楽しんでおられるように見受けられる。ノウハウの蓄積と熱意をもって作業に参加される人々の存在が今の宮城資料ネットの活動を支えているといえよう。

その宮城資料ネットの活動は、これまで災害研・宮城資料ネット・上廣部門の活動を一手に牽引されてきた平川新氏（災害科学国際研究所所長）が学長として宮城学院女子大学に転任され、今大きな節目を迎えつつある。上廣部門としては、今後、災害研の歴史資料保存研究分野との連携をより一層深め、宮城資料ネットの活動をより実りのあるものにしていきたいと考えている。

編  
集  
後  
記

今年度最初のニューズレターをお届けします。新任の方をお迎えしたことに加え、3月の皆様の活動が活発だったこともあり、本号も充実の内容になっています。特に3月28日の研究成果報告会は、私にとって有意義でした。おぼろげながらも皆様の研究について知ることができ、ポスター発表も初めて経験しました。10分という時間、A4の紙1枚、ポスター1枚で自分の研究をどう表現するか、考える良い機会となりました。（高橋陽一）

東北大学 東北アジア研究センター ニューズレター 第61号 2014年6月26日発行

発行 東北大学東北アジア研究センター 編集 東北アジア研究センター広報情報委員会  
〒980-8576 宮城県仙台市青葉区川内41番地 東北大学東北アジア研究センター  
PHONE 022-795-6009 FAX 022-795-6010 <http://www.cneas.tohoku.ac.jp/>

